

# welfare [ウェルフェア]

## 「平成30年度 社会福祉助成事業 実施要綱」決定

2017

62

### CONTENTS

- P2 平成30年度 社会福祉助成事業実施要綱
- P4 くっきり! 福祉の未来形 ~日社済助成事業成果報告~  
地域住民が主体となり企画・運営する  
認知症カフェの効果的な実施方法の検討  
社会福祉法人 東北福祉会  
当事者参画型ひきこもり支援者養成研修プログラム開発  
特定非営利活動法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク  
自信をもって仕事をするためにー  
経験2年目~3年目の人のための介護職員研修  
介護保険市民オンブズマン機構大阪
- P10 空飛ぶ車いす  
7回目の東北支援活動!
- P13 車いす修理台数2000台突破
- P14 バングラデシュからのお礼状
- P15 福祉の共済コーナー

# 社会福祉助成事業 実施要綱

公益財団法人日本社会福祉弘済会では、少子高齢化が進展し、多様化する福祉需要のなかで社会福祉の向上を目指した“研修事業”や“研究事業”に助成することにより、豊かな福祉社会の実現に寄与することを目的といたします。

平成30年度も下記の通り、社会福祉関係者(社会福祉施設等社会福祉事業に従事する方々等)に係る研修・研究事業に対して、公募による助成事業の募集を行います。

## 1 助成対象事業と助成対象経費

### 【研修事業】

#### ①対象事業

- 福祉施設職員の方などを対象としたケース

福祉施設職員等が幅広い視野と専門性を持って福祉サービスの支援業務向上に携わるために実習する研修事業

- 地域住民の方などを対象としたケース

福祉サービスのあり方や専門的知識・技能の習得などをテーマとして開催される集合研修事業(研修会、セミナー、講演会など)

#### ②対象経費

講師謝金・交通費・宿泊費・会場費・報告書作成費

### 【研究事業】

#### ①対象事業

- 福祉サービスの向上等を目的とした先駆性ある事業の実践を通して行われる研究事業

- 社会福祉関係者の専門性の向上、現任訓練の方法や体系、また就労、福利厚生などをテーマとする調査研究事業

#### ②対象経費

研究事業費・調査経費・謝金・原稿料・報告書作成費

## 2 事業実施期間と助成金額

#### ①事業実施期間

平成30年度(平成30年4月から翌年3月末)中に実施される事業

#### ②助成金額

1件(1団体)あたりの上限額50万円(総額2,000万円以内)

※助成対象経費合計の80%以内かつ50万円以内となります。



公益財団法人 日本社会福祉弘済会

申請書用紙等はホームページからダウンロードできます

<http://www.nisshasai.jp/>

### 3 申請条件

- ①申請団体は社会福祉事業や福祉施設の運営、福祉活動などを目的とする社会福祉法人、福祉施設、福祉団体などとなります。(申請は1団体、1事業とします。)
- ②法人格のない任意団体、グループは申請書下段に市区町村社会福祉協議会の推薦を得て、申請書をご提出ください。
- ③反社会的勢力及び反社会的勢力と関係すると認められる法人、団体からの申請は受けられません。
- ④助成対象となった場合、団体名、代表者氏名、所在地、事業内容、助成金額等を公表させていただきます。また、実施事業に参加もしくは事後に訪問させていただくことがありますので、ご了承の上お申し込み下さい。

### 4 申請方法

- ①申請書 平成29年9月以降に、日本社会福祉弘済会のホームページをご覧ください。  
<http://www.nisshasai.jp/>  
申請書用紙等はホームページからダウンロードの上、ご使用ください。
- ②申請期間 平成29年11月1日～平成29年12月15日(消印有効)
- ③提出先 〒130-0022 東京都墨田区江東橋4-24-3  
公益財団法人日本社会福祉弘済会 助成事業係 ☎03-3846-2172

※申請書に記載されている個人情報は本事業の選考に関わる業務のみに使用し、それ以外には使用いたしません。

### 5 添付資料

申請時に下記資料を添付の上、申請書と共にご提出ください。

- ①申請団体の定款(任意団体は規則、規定)
- ②申請団体紹介パンフレットや団体発行の機関誌など
- ③申請団体の直近の事業報告、決算書
- ④申請団体の役員(会員)名簿

### 6 審査と結果通知

- ①申請案件は厚生労働省専門官の予備審査後、選考委員会の選考を経て、理事会(3月開催)で決定します。
- ②選考結果は採否に関わらず決定後、各申請団体に書面にて通知いたします。
- ③申込み書類は返却いたしません。

### 7 事業完了報告書の提出

助成事業終了後1ヶ月以内に、事業完了報告書をご提出下さい。

※事業完了報告書の作成要領は、助成決定時にご通知いたします。

● 助成事業成果報告

## 地域住民が主体となり企画・運営する 認知症カフェの効果的な実施方法の検討

社会福祉法人 東北福祉会

理事長 清水 秀夫

### 一、はじめに

社会福祉法人東北福祉会は、「これからの福祉のあり方」を考えるための実践施設として、「せんだんの杜」「せんだんの杜のう」「せんだんの里」「せんだんの館」及び附帯施設「認知症介護研究・研修仙台センター」を設置・経営している。特に、学術研究等による「最先端知」と「理論知」、社会福祉事業の実践により培った「実践知」のコラボレーションナレッジー実践に基づく知的協働体ーを通じて、サービスを利用する当事者及び地域住民が、「自分らしさ」をいつまでも保ち続けられるように生活支援を行っている。

### 二、助成事業概要

#### 実施目的

1 地域住民が主体となって認知症カフェを継続的に企画・運営することにより、認知症の人と家族介護者の生活支援に寄与し、地域住民に対する認知症に関する正しい理解等を啓発できるようにする。

2 地域住民が主体となって認知症カフェを企画・

運営するために必要な支援ツールを開発する。

#### 時期

平成28年4月から平成29年3月迄

#### 内容

1 認知症カフェを月1回定期的に実施することをターゲット地域等に対して広報し、広く認知できるようにする。

2 認知症カフェを『午後の音楽café』として実施し、優れた音楽演奏を楽しめる場、もの忘れと認知症を正しく理解できる場、相談支援専門職とつながれる場とする。

① 地域住民が気軽に立ち寄れる場を形成し、認知症に関する正しい情報を広く啓発できるようにする。

② MCI(軽度認知障がい)の人、認知症の人と家族介護者が、相談支援専門職者等とつながるきっかけの場、必要な介護サービスなどと結びつく場とする。

### 三、事業の成果

1 社会福祉法人東北福祉会せんだんの杜が行う認

知症カフェを『午後の音楽café』とし、月1回定期開催することができた。

2 認知症カフェへの来訪者は、毎回約50名から60名以上となり、認知症に関する正しい知識等を広く啓発することができた。さらに、毎回初めて訪れる人や見学者(介護事業者、教育関係者等)がおり、またターゲット区域を超えて来訪する人もいて、認知症カフェの広がりや一定程度得ることができた。

3 認知症カフェの企画・運営及び評価にあたって、代表的な地域住民といえる「吉成学区社会福祉協議会会長、役員、構成員並びにボランティア団体「ボラネット杜の丘」代表、メンバーが積極的に参画し、主体的かつ詳細な検討を継続して行い、地域住民が認知症カフェを主導的に実施することができた。特に、毎回実施後の評価にあたっては、認知症カフェを訪れた住民の様子や反応、口コミ・評判、プログラムの効果等を検討して、企画内容の修正、来訪した住民とのコミュニケーションの図り方や配慮、必要なケアの方法等を充実することができた。

4 『午後の音楽café』では認知症カフェの実施形式を次のように形成することができた。

①フロア内のアナウンスは極力行わないようにし

て自由なカフェの雰囲気や自然に醸成する。②基本プログラムは、音楽（生演奏）・もの忘れと認知症の話し・テーブルトークキング（ディスカッション等）・音楽（生演奏）とした。③各テーブルに生活相談員や介護支援専門員等を配置して、話題提供や認知症理解の促進、相談支援の必要性の把握等を行う。④フロア内に地域包括支援センターや居宅介護支援事業所の社会福祉士、看護師及び介護支援専門員をフリーに配置して、個別に相談室で対応できるようにする。⑤認知症に関する情報・相談コーナーを設置して、来訪者が気軽に相談できるようにする。

これらによって、来訪した認知症の当事者や家族介護者、その他の来訪者に対し、希望に応じた相談支援及び情報提供を行うことができた。

5 以上により、別冊「実践研究事業報告書」及び支援ツール小冊子「私たちのまちに認知症カフェをつくってみませんか？」を成果物として作成することができた。



「ミニコンサート」ピアノ演奏：佐藤真弓氏



認知症劇団「ゆめもり座」公演



「講話」：矢吹知之氏

#### 四、成果の広報・公表

1 認知症カフェ『午後の音楽café』広報チラシとあわせて、支援ツール「小冊子」の告知を近隣地域に配布及び掲示する。

2 社会福祉法人東北福祉会ホームページに、本実

践研究事業の成果を掲載し、あわせて「実践研究事業報告書」及び支援ツール「小冊子」をPDF化したファイル（変更防護措置済）を掲示して、自由にダウンロード・印刷できるようにする。

3 仙台市内で認知症カフェを実施する団体、同実施を希望する団体、ボランティア団体、認知症の人の支援に関係する団体等に対して、「実践研究事業報告書」及び支援ツール「小冊子」を無料で配布する。

#### 五、今後の展開

1 認知症カフェ『午後の音楽café』は今後も「吉成学区社会福祉協議会」並びに「ボランティア杜の丘」等とともに月1回定期開催して、正しい認知症の知識等の啓発及びMCIの人、認知症の人の発見と本人及び家族介護者に対する相談支援等を継続して行う。

2 地域住民が主体となって認知症カフェを継続的に企画・運営することを引き続き啓発し支援するため、支援ツール「小冊子」の普及に努める。

3 さんだんの杜における今後の実践成果及び社会福祉法人東北福祉会のその他3拠点における認知症カフェの実践等を踏まえて、支援ツール「小冊子」の改良を検討する。

4 認知症カフェの企画、運営等に関係する人、来訪者等における協力者により、独居世帯、高齢二人暮らし世帯、日中独居世帯等のMCIの人及び認知症の人に対する訪問支援（認とも）の有効性、実現性等について検討する。

5 認知症の人等に対する訪問支援を実施するにあたって、必要な教育訓練の内容及び実施方法等について検討する。

● 助成事業成果報告

# 当事者参画型ひきこもり支援者養成研修プログラム開発

特定非営利活動法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

理事長 田中 敦

## 一、はじめに

当NPOは概ね35歳を起点にした全国的にも珍しい中高年ひきこもり当事者主体の任意団体として平成11年9月に創設。平成22年3月にNPO法人格を取得以降は、精力的にひきこもり当事者視線を重視したひきこもり当事者参画型の実践活動を幅広く道内各地で展開してきた。

主たる事業は定款5条に基づき外出困難なひきこもり当事者とその家族への相談支援活動、人間関係づくりを学習する自助グループ運営活動、ひきこもり者とその家族等に役立つ広報出版活動、中間労働（在宅ワーク）を構築する活動、他団体とのひきこもり支援ネットワーク等を中心に活動している。

## 二、助成事業概要

ひきこもり支援が当事者一人ひとりの思いに沿うものとなっていないケースが少なからず見受けられる。そのため本調査研究では、ひきこもり当事者の共通した思いを汲み取っていくことが可能となりうる当事者参画型によるひきこもり支援者養成研修プ

ログラムの開発を目的に実施した。

実施にあたっては、平成28年4月～12月にかけて内外の有識者12名による調査研究委員会（電子会議）を計5回実施し本調査研究の重要な事項を協議した。平成28年8月～9月にかけては北海道内のひきこもり当事者個人（家族）及び支援団体機関を対象に質問紙調査票を郵送して、ひきこもり養成研修プログラム開発のための「当事者ニーズ調査」を実施した。またその調査結果を踏まえ「養成研修プログラム試案検討会」を調査委員会内で議論を重ね、協力団体講師の適切な助言等をいただきながら「養成研修プログラム開発モデル事業」を最終的に計画化した。

モデル事業は平成28年10月30日に「それぞれの経験的知識がつなぐひきこもりピアサポート」として一般公開され、全国各地で先駆的にピアサポートを実践



ピアサポートの講義

する代表者6名を招聘して講義と演習を組み合わせた形式で行われた。ピアサポートを实践するうえで必要不可欠な実践体系を理論的パラダイムに準拠して学ぶ機会となった。



ピアサポートの演習

## 三、事業の成果

本開発事業ではとくに当事者主体のピアサポートに着眼し、当事者の立ち位置から今日のひきこもり支援者養成研修のあるべき方向を考察することをねらいとして下記に示す3つの構成内容で実施した。

1 当事者ニーズ調査では、26項目に及ぶ調査票を北海道内のひきこもり当事者個人（家族）及び支援団体機関90箇所へ郵送し最終的に68通（回

取率76%)の回答があった。調査からはピアサポートに求められる「同様な立場にあるものとしての共感性」「苦勞を分かち合える感受性」が上位を占めながらも、課題として「対話が難しい当事者との関係性づくり」に困難があるとの回答が上位を占め、ピアサポート以外の必要な支援として「親亡き後の生活支援」が半数を超える結果となり、今後一定のピアサポートの限界を認識しつつ、高齢化を増すひきこもりなどのようにピアサポートが対峙していくことができるのかという課題が残された。

2 「養成研修プログラム試案検討会」では、ひきこもり領域のピアサポート活動については現場での定着が未成熟のうえしつかりとした議論が積み重ねられていない現状認識のもと当面直面する課題や今後のあるべき姿など多岐にわたって建設的な意見交換ができたこと共に、当事者ニーズ調査結果による分析を活かした養成研修プログラムの試案としてソーシャルワーク実践体系の構成要素としての価値理念、経験的知識(実践的知識)、方法・技術に立脚したミクロ、メゾ、マクロソーシャルワークを展開する理論パラダイムに準拠した養成研修プログラム開発モデル事業を計画化することができた。ピアサポートの有効性はエビデンス(科学的根拠)に基づいて説明されてきたとはいえず、専門性との差異化よりもどのように専門性と共存共栄していくことができるかが支援者養成を考えるうえで必要となる。

3 養成研修プログラム開発モデル事業では「それぞれの経験的知識がたぐひきこもりピアサ

ポート」では、ひきこもり当事者の申込みが多目立ち参加者は41名、関係者スタッフを含めると50名を超えた。期待されるピアサポートは必ずしも個別家庭訪問活動のみを前提としているものではなく、当事者会や自助会での活動、さまざまな当事者主体によるイベント活動、文化芸術活動、手紙(絵葉書)によるアウトリーチのほか、非支援の枠組みの提示など幅広く存し、その可能性を示唆するものであった。

#### 四、成果の広報・公表

本調査研究事業の内容をまとめた「当事者参画型ひきこもり支援者養成研修プログラム開発調査研究事業報告書」A4判綴じモノクロ37頁300部印刷製本)には、本調査研究の目的、支援者養成研修の動向と課題、本調査研究の視座と方法、当事者ニーズ調査結果、開発モデル事業の概要、事業成果の複眼的考察が掲載されている。北海道をはじめ全国で活動するピアサポート実践者の最新の動きを幅広く理解できる報告書であるため、ひきこもり当事者はもちろんのこと、関心を寄せる家族や支援者にも郵送等にて頒布し、また広く一般市民への理解啓発の意味からWEB上で無料閲覧できるようにした。また当NPOのSNSなどを通して本事業報告書を紹介したところ、多数事前申し込みがあり、ひきこもりピアサポートに興味関心を寄せる人たちへの理解啓発につながったと思われる。

そのほか、平成29年2月に大阪府豊中市で開催された「若者当事者全国集会」、同年3月に駒澤大学にて開催された「第12回全国若者・ひきこもり協同実

践交流会 in 東京大会」など、ひきこもりに関するイベント活動を通して事業報告書発刊の周知を行い、広くその内容についてアナウンスを行った。

#### 五、今後の展開

厚生労働省では平成25年度から「ひきこもり対策推進事業の拡充」としてピアサポートを含む「ひきこもりサポーター」養成研修・派遣事業を各自治体に対して実施するよう働きかけがなされているが思うように養成や派遣活用が進んでいない課題があり、本調査研究がこれに少なからず寄与する成果として今後の実践活動の参考とされていくことを願うものである。

北海道では平成27年12月に当NPOを含む3団体によって「ひきこもりサポーター養成協議会(仮称)」を設置したところであり、まだまだ未確立なひきこもりサポーター並びにひきこもりピアサポートについて専門機関との協同作業のなかでさらに継続した議論をしていきたいと考えている。

またこれとは別に当NPOが呼びかけて北海道内で活動する5つの当事者団体が加盟する「北海道ひきこもり当事者連絡協議会」が設置要綱のもと平成28年10月に発足した。北海道ひきこもり当事者連絡協議会にはそれぞれの当事者団体が自分たちの活動の限界点を真摯に受け止め、自団体でできないところや異なっているところを相互に補いながら協同実践していく緩やかなネットワーク形成が期待されており、地域間・団体間の連携促進が図られる協同実践のありようが今後のピアサポートのさらなる発展につながることを願っている。

● 助成事業成果報告

# 自信をもって仕事をするためにー 経験2年目～3年目の人のための介護職員研修

介護保険市民オンブズマン機構大阪

代表理事 三木 秀夫

## 一、はじめに

「告発型ではなく橋渡し役」を基本に、専門研修を受けた市民を「介護オンブズマン」として施設に派遣することを通して、介護保険が目指す「市民参加」のコンセプトを社会に根付かせ、介護サービスの質の向上を図っている。オンブズマン活動を通して、市民自らが施設介護について「見る目」を養うことが、将来、自分たちが「入りたいと思える施設」を増やすことにもつながるのではないかと考えて活動を展開。主軸事業の「市民オンブズマン活動」のほか、「市民オンブズマン養成講座」「施設職員研修」「講演会の開催」「冊子の発行」などにも取り組んでいる。

## 二、助成事業概要

### 実施目的

介護職員も経験2～3年目になると、上司に判断を仰ぐばかりではなく自分で判断・行動していかなければならぬことが増えてくる。2～3年目の職員に時間を割いて教える余裕がない職場も多い。そ

うしたなかで、「認知症高齢者との意思疎通が難しい」「高齢者の身体状況を的確に把握できず、家族から質問を受けてもうまく答えられない」「応用できない」など、迷いや不安、自信のなさを抱えながら仕事をしている人も少なくない。そこで、経験2～3年目の人たちを対象とした集合研修を実施することによって、自信を持って仕事をし、仕事への定着率向上につながるための一助とする。

### 開講日

平成28年10月21日午前10時～午後4時45分

### 内容

2つの講義とグループディスカッションで構成。特養・介護付き有料老人ホームなどの職員63名が参加した。午前中は「介護職が知っておきたい医療知識と観察のポイント」、午後は「パーソン・センタード・ケアから学ぶ認知症への理解と対応」を実施。その後、8班に分かれてファシリテーターのサポートのもと、グループディスカッションを開き、2つの講義を聴いての感想、仕事の上で悩んでいること、モチベーションアップのために工夫していることなどについて意見交換を行った。

## 三、事業の成果

- 1 経験2～3年目の介護職員が、応用力をつけ、自信をもって仕事をしていくためには、「認知症」と一定の「医療」の知識が不可欠であると考えてこの研修を企画したが、受講生からも好評で「内容が充実していた」という声を多数得ることができた。アンケート結果においても「大変良かった」が38・3%、「良かった」が58・3%で、全体の96・6%という高い評価結果となった。
- 2 講義「医療知識」では、施設入居者に多い病気と体調観察で注意したい点を効果的に学習。介護職員であつても一定の医療知識を持つことの大切さを伝えることができた。また利用者をしっかり観察し「いつもと違う」という感覚を大事にする必要性についても理解を促すことができた。
- 3 講義「パーソン・センタード・ケア」では、業務優先になりがちな日々の介護を振り返り、すぐに「問題行動」ととらえがちな利用者の言動の背景に何があるのかを考え対応することの必要性を伝えることができた。講義の中では具体的な事例も多く出されたため、自分たちのこ



ととしてとらえやすく、認知症ケアの課題を共有することができた。

4 グループディスカッションでは、受講申し込みの際に募った受講者からの事前質問をもとに、話し合う内容を決めたが、メンバー間の会話を通して、他施設の職場の様子を知るとともに、2年目・3年目という介護職の微妙なキャリアの中で、「みんな同じような悩みを抱えているのだ」「戸惑っているのは自分だけではないのだ」ということを共有することができた。また、「業務をこなしながらどのように利用者と話す時間を捻出するか」「ストレス解消はどのようにしているか」といったことについても出し合い、チャレンジできそうな臨み方について意見交換を図ることができた。アンケートには「働き始めた頃を思い出し、頑張ろうと思った」との声もあった。率直に現在の気持ちを吐露することで気分転換を図り、新たな気持ちで仕事に臨むきっかけづくりを提供することができた。



水野先生



グループディスカッション 発表者

## 四、成果の広報・公表

1 経験2～3年目という「一人立ち」に必要な節目の時期に、「医療知識」と「パーソン・センタード・ケア」という認知症ケアに必要な考え方をしっかり学ぶことによって、自信をもって仕事をしたいための土台を培うことができた。また、ともすれば業務に流されマンネリになりがちなケア方法や考え方を、改めて見直すきっかけを提供することができた。グループディスカッションで気持ちを吐き出すことにより、気分転換を図り、新たな気持ちで仕事に臨む契機ともなった。

2 「医療知識」では「普段から利用者の様子をよく観察する」、「パーソン・センタード・ケア」では「介護する側の立場ではなく、認知症の人の立場から考えてみる」という2つのポイントをしつかり伝

えることにより、一段高い視点をもって利用者と接し介護していく力を育むことができた。

## 五、今後の展開

1 受講アンケートでは「継続を望む」と、来年度の研修を期待する声もあった。また、「この研修を同僚や知人にも勧めたいと思うか」との質問にも、78・3%が「思う」と答えていた。介護職員の人々のニーズは高いと思われるので、来年度は自主事業として開催できればと思う。

2 今回の研修では、介護職として抱えている悩み、ディスカッションで話し合いたいこと、聞いてみたいことがあるれば、事前に受講申込時に記載してもらおうとした。職員研修実行委員会では記載内容を検討。認知症・働き方・人間関係・個別対応・医療関係の順に記載内容は多かった。ディスカッションでは事前質問の結果にも言及したが、ファシリテーターから説明がなかったグループもあった。よう、受講者の中には不満もあった。今後の開催においては、周知徹底などの工夫が求められる。

3 受講アンケートでは、今後学びたいテーマとして、「コミュニケーションや職場での人間関係」(延べ51人)、「認知症の利用者に対するケアと生活環境づくり」(40人)を挙げる声が多かった。認知症ケアの充実には施設において虐待防止にもつながる重要事項であるため、ケアと環境、ソフトとハードをキーワードに、新たな切り口での研修も企画していきたい。

## 7回目の東北支援活動！

東日本大震災の被災地に車いす支援に乗りだしてから、今年で7回目になります。今回は5月3日～6日のゴールデンウィークに女川町社会福祉協議会、大船渡市老人保健施設気仙苑、大船渡市社会福祉協議会を訪れた神奈川工科大学、新潟医療福祉大学の学生たちのレポート（抜粋）をお届けします。

### 修理できたのは1台だけ、悔しい

神奈川工科大学1年

山口 玲之

今回、初めて学外の修理会に参加して、自分の被災地に対する考え方が大きく変わったと感じています。まだ、瓦礫が点在し仮設住宅だらけだと思っていました。実際に見ると新しい住居や新しい道路などが整備されており、力強さのようなものを感じました。活動2日目大船渡の老人保健施設で私は自分の未熟さを痛感しました。修理できたのはたったの1台だけでした。同時に次の機会では倍以上直してやろう！と決めた瞬間でもありました。だから、私は来年もこの東北活動に参加したいと考えています。

### 来年の変化を見てみたい

神奈川工科大学2年

吉村 郁美

車いす修理が役立つの？という問いに、私は復興に役立つと思います。昨年、修理・点検

が行われていた車いすでも車輪の回りが悪くなっているものがあり、1年経つと動きが悪くなってしまふのであれば定期的な修理活動は大切なことだと感じました。もし、来年参加するとしてプログラムを追加するのであれば、三陸鉄道を見てみたい。震災の被害を受けた三陸鉄道に乗り復興している町の状況を見るのは東北復興の状況を全体的にみる事ができると考えるからです。また、今年訪れた所を再度訪問し復興の流れ・経過を見てみたいと思います。

### 看護師を目指した日

神奈川工科大学2年

武藤 英里

私が看護師を目指すようになった理由のひとつが2011年3月11日の東日本大震災です。看護師になって真っ先に被災地へ出向き、動ける人間になりたいと強く感じ、災害時看護が学べる看護学部に入學しました。今回、私たちの車いす修理活動は地道な活動ですが、車いすを利用する方がきれいに整備されたものを使い復興を身近に感じられたらと思います。また、この修理活動が



気仙苑での活動



女川町社協周辺の様子

復興に役立っていると信じたいです。

### 自己満足で終わらせない

神奈川県工科大学3年

羽賀 大樹

毎年行っている東北活動が復興の役に立っているか自己で判断するのは難しいと感じます。我々が一方的に車いすを修理しに行って喜んでいるだけではただの自己満足ではないからです。他者からの評価があると役立っているかどうか判断ができると考えます。今後は利用者とのふれあいを増やすことを希望します。そうすることで、修理活動に一層力が入ると思われれます。

### 津波に耐えた一本松に感動

新潟医療福祉大学1年

土橋 茜

今回初めて被災地を訪れてみてテレビで見えていた震災直後から比べると復興は進んでいると思ったが、今までどおりの生活を送れそうかと言ったらまだまだだと思いました。活動最終日に奇跡の一本松を実際に



奇跡の一本松

見ると周りのパイプや建物が壊れたにも関わらず津波に耐え、6年経った今も松が生きていることに感動しました。

### もっと多くの人に知ってほしい

新潟医療福祉大学1年

鳥越 佑香

私は今回参加して、被災地がどのように復興してきたのかをあまりにも知らな過ぎていたことに気付きました。今回参加していなかったらもっと知らずにいたと思うと怖くなりました。なので、もっと多くの人に被災地の状態や当時からの変化を知ってもらいたいと強く思いました。今回の経験をサークル活動や義肢装具関連のフェア、海外活動など他の多くのことに活かしていきたいと思っています。

### 被災地訪問は少し戸惑った

新潟医療福祉大学1年

大島 沙菜

被災地での修理はとて面白い経験になりました。直接的には復興に役立ってはいないかもしれませんが、毎年毎年東北に行くことを続けることで施設にいる方に気持ちや心のサポートは出来ると思います。間接的ではありますが復興につながっているのではないかと考えます。

### 忘れないことも支援？

新潟医療福祉大学2年

藤田 歩

震災後毎年行われているこの車いす活動は、もしかしたら被災地に住む人々や他の人から見ても些細なことかもしれませんが。しかし、車いすを必要としている人も少なからずいるはずで、誰かの役に立っている活動だと思います。車いすを必要としている人たちがいる限りこの活動は続けていくべきだと考えます。

### 来年は地元と同世代と交流を

新潟医療福祉大学2年

越坂 香南

地元で修理活動をしている学生がいれば、その人たちと一緒に修理をしたいと思いました。同年代の人たちから震災当時のことを聞くことができれば、もっと震災に対して親近感のようなものができるのではないかと考えます。昨年より復興した宮城、岩手の景色を見られたことが本当に良かったです。

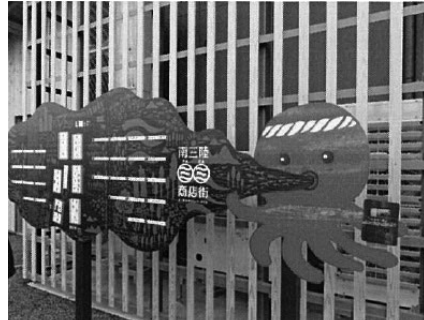
### 震災を忘れずこの経験を もっと伝えたい

新潟医療福祉大学2年

市川 瞳

南三陸商店街と奇跡の一本松はGWとはいえ、

とても混雑して  
いました。商店  
街は復興の象徴  
として、奇跡の  
一本松は津波に  
よる甚大な被害  
を忘れないよう  
にするための  
人々の戒めとし  
て南三陸の新た  
な観光地となっ  
ています。これ  
からも可能な限  
り東北修理会に  
参加したいと強  
く思いました。



さんさん商店街

## できることを積み重ねて

新潟医療福祉大学2年

横山 侑

この東北修理会で学んだのは、自分たちので  
きる範囲で活動する姿勢と想いを忘れずにい  
ることが大切だと感じました。目の前のでき  
ることをまずこなしていき、それがいつか積みあが  
っていくのを願って、自分もより様々なことを勉

強していきたいと思っています。

## 津波の跡にはまだ何も無い

新潟医療福祉大学2年

藤原 伊織

今回の活動で私は被災地の現状を自分の目で  
見て知ることができ復興の難しさを感じました  
が、現地の方々がそれぞれの町を取り戻そうと  
努力をされており、その手伝いをしていきたい  
と思いました。車いす修理という限られた範囲  
ですが今後も継続していきたいと思えます。

## 「またよろしく」の言葉が うれしかった

新潟医療福祉大学2年

星野 快成

今回の東北修理会を通し、強く感じたことは車  
いす修理技術の向上です。二日間で凝縮された修  
理時間を過ごすことができ、良い体験になりました。  
「また、来ていただけていただき、この活動は微  
力ながらも復興に役立っていると思えました。」

## 震災を忘れない

新潟医療福祉大学2年

石川 翼

車いすの修理活動自体が復興という意味で役

目を果たしているかどうかはわかりませんが、そ  
れをあえて毎年ボランティア活動として行うの  
はボランティアにも震災を忘れない、受け継ぐこ  
とが復興の一環になるからだと思えます。

## 来年も同じ場所に立ちたい

新潟医療福祉大学3年

山村 安優美

学外の活動は初めてでしたが、老人ホームで  
は実際に使用する場所や利用者様を見ながら修  
理活動ができるのはいいなと思いました。もし  
来年も参加できるとしたら、今回と同じ場所を  
回って一年間にどれだけ復興が進むかを見てみ  
たいと思いました。

## 来年も参加して復興を確かめたい

新潟医療福祉大学3年

内藤 美穂

修理会において、現地の人が笑顔で声をかけ  
てくださった時は来たかいがあったと強く感じ  
ました。来年もこの活動に参加して、今回か  
ら聞いた復興の変化を自ら感じたいです。また、  
機会があれば、津波避難の呼びかけを行うため  
最後まで残っていた防災施設を訪ねたいです。

# 車いす修理台数2000台突破!

## ～神戸市立科学技術高校～

国内で使われなくなった車いすを、全国の高校生・大学生などが修理・整備し、アジアなどの各国に届ける「空飛ぶ車いす」活動。神戸市立科学技術高校の「空飛ぶ車いす研究会」では、この修理活動を2004年から始め、修理台数が今年区切りの2000台を突破しました。この活動が、テレビ、ラジオ等各メディアに取り上げられ、生徒たちの活動の様子やこれからの抱負などについて、今回毎日新聞兵庫版に掲載された記事をご紹介します。



2017年(平成29年)6月19日(月)

淡路 神戸 **兵庫** 22

### 「空飛ぶ車いす」2000台に



#### 科技高中生 リサイクル▼▼途上国へ

使われなくなった車いすを工業高校の生徒らが修理再生し、アジアなど途上国の子どもや高齢者に贈る国際協力、「空飛ぶ車いす」活動。神戸市立科学技術高校(中央区)では2004年から修理ボランティアを実施、これまで計2000台の車いすを整備点検し、諸外国へ送り出した。

999年に栃木県立栃木工業高で始まり、全国に広がった。施設などから寄せられた中古の車いすをよみがえらせ、旅行者に手荷物として運んでもらうなどの方法で、車いすを入手しにくい地域へ届けている。公益財団法人「日本社会福祉弘済会」が支援、橋渡しをし、修理と輸送のグリーンボランティアで活動を支える。科学技術高では部活動の「空飛ぶ車いす研究会」で23人の部員が修理に取り組み、状態に応じて部品を取り換えるなどし、安全で使いやすいように工夫しながら作業。舗装道ばかりではない現地の状況を考え、タイヤは全て空気を入れる手間が

①2000台目の車いすの発送準備が整い喜ぶ生徒たち  
②ノーパンクタイヤへの交換は必須の作業。力を合わせて「つぎやう」できたー  
〓神戸市中央区の市立科学技術高校で

いらぬノーパンクタイヤに交換。3年の川拓真さんは「まっすぐ動かせないように左右のバランスチェックも大切」と話す。15日には2000台目の車いすの荷造りを終え、皆で拍手して喜び合った。  
バン格拉デシュなど送り先から届く、笑顔の写真や手紙は、生徒たちの励みだ。2年の横田実結さんは「はやくよかった。もっときれいに直そうと張り切ります」と目を輝かす。活動を通して、福祉機器が行き届かない途上国の現状も学ぶ。顧問の有吉直文教諭(39)は「一台の車いすが誰かの可能性を広げられる。利用者の元に向いて直接手渡しできる日を指して活動を進めたい」と展望を語る。夏休みには市内の老人ホームで訪問点検も行い、限られた時間と工具での整備に汗を流し技術を磨いている。

【木田智佳子】

©毎日新聞兵庫版 2017年6月19日(月)記事 許諾済



## 空飛ぶ車いす Bangladeshからのお礼状

今回は Bangladesh マイメンシン県にある障害者センターおよびラルシュコミュニティに寄贈された「空飛ぶ車いす」について利用者からの感謝のメッセージを一部ご紹介します。

### モハマドロムジャン・アリさん

モハマドロムジャン・アリさんは55歳の男性です。彼はマイメンシンのチャルイサルディアというところに住んでいます。彼は4人家族です。

ラムザンさんは身体に障がいを持っています。彼は物乞いをして生活をしてきました。3回脳卒中を起こしましたが、その都度わたしたちの障害者センターでリハビリを受けて回復して、仕事に復帰してきました。しかし、今年の6月に起こした脳卒中は重篤で、彼は言葉を失い、右の半身不随になりました。それからは、表に出ることもできなくなりました。

彼の妹が唯一の介護人です。ロムジャンさんの奥さんもだいぶ前に脳卒中になり、妹さんが二人を面倒見えています。その妹さんが障害者センターを訪れ、ロムジャンさんを外出できるようにするために、車いすを求めてきました。ロムジャンさんは、周囲の人びとと会いたがっていました。車いすをはるばる Bangladesh に贈ってくださった皆様に心からお礼を申し上げます。



### ココンさん

こんにちわ、ココンです。ラルシュの男性の家、アシャニール（希望の家）で暮して10年になります。今だいたい23歳くらいかな。僕は片足が無いので、車いすはとても助かります。義足はあるのですが足に傷ができることが多く、車いすは欠かせません。皆さんから届く車いすは軽量でかつとても丈夫なので、片足でプッシュしながら後方にぐるぐる動きまわることができるので、いつも楽しんでます。

僕の家族はバスの炎上事故でみんな亡くなりました。僕は助かったのですが、その時に背中に大火傷を負い片足も失くしました。今でも身体に火がついたように感じる時があり、そんな時は走り回って最後は水浴び場に飛び込んで、桶でジャブジャブと水を掛けると何とか治まります。僕は言葉で話すことはありませんが、みんなの言ってることは良く分かってるんです。

僕は障がいの重い仲間達と一緒に遊んだり一緒に出かけたりしています。でも重い自閉があるから、べったりというよりは自分流のスタイルで暮らしています。車いす、本当に嬉しいです。どうも有難うございました。



#### ラルシュコミュニティリーダーより

これまで頂戴した車いすは計4台になります。心から感謝申し上げます。これからも皆様からのご支援を賜りますよう、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

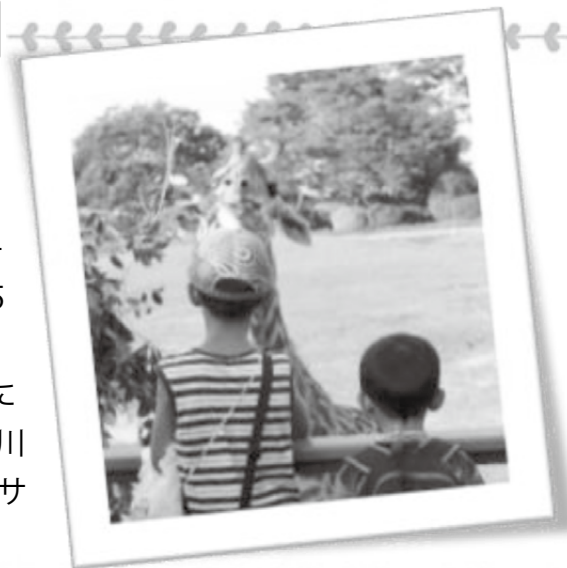
# ー ジブラルタ生命保険株式会社の社会貢献活動ー 「ドリームナイト・アット・ザ・ズー」を通じて 障がいのある子どもたちをサポート

## 「ドリームナイト・アット・ザ・ズー」とは？

「ドリームナイト・アット・ザ・ズー」は、障がいのある子どもたちとそのご家族を、閉園後の動物園や水族館に招待し、気兼ねなく楽しいひと時を過ごしてもらう国際的なイベントです。

1996年、オランダのロッテルダム動物園ががんを患っている子どもたちとそのご家族を招待したことから始まり、日本では2005年によこはま動物園ズーラシアで初めて開催されました。

ジブラルタ生命はこの趣旨に賛同し、2012年からこのイベントに協賛。2017年は新たに宮城県を加えて、北海道・千葉・東京・神奈川県・広島・愛媛・高知・福岡・鹿児島、10箇所の動物園や水族館をサポートします。



## 社員ボランティア 活躍中！



ドリームナイト・アット・ザ・ズーのイベント当日は、開催地近郊に勤務するジブラルタ生命の社員がボランティアとして参加。

動物フェイスシールのサービスやスタンプラリー、着ぐるみパフォーマンスなどで笑顔いっぱいのおもてなしをしています！



## 参加した子どもたちの家族から

子どもも喜んでいましたが、私自身何十年ぶりの動物園で、なんだか子どもころに戻ったような気分でした！ あっという間に過ぎていきましたが、笑って癒されたひとときでした。

障がい児を抱えていると、なにかと外出にハードルが高いですが、今日は安心して家族で楽しむことができました。  
ありがとうございました！

ジブラルタ生命は、世界最大級の金融サービス機関  
プルデンシャル・ファイナンシャルの一員です。



Gibraltar  
ジブラルタ生命

保険に  
愛という本質を

# 「空飛ぶ車いす」は、日本で使われなくなった車いすを 日本の工業高校生が修理・再生して アジアに贈るボランティア活動です。

「空飛ぶ車いす」は、  
多くのボランティアに支えられています。

## 修理 ボランティア

工業高校のクラブ活動や有志、  
生徒会などで車いすの  
修理を行います。

## はがき収集 ボランティア

全国の「はがき収集ボランティア」から  
届けられた「書き損じはがき」を切手  
に交換し、さらに企業等の協力により  
切手を現金化して“バンクしないタイ  
ヤの購入費用”や“工業高校から  
国際空港までの車いす輸送費用”に  
充てています。

## 輸送 ボランティア

ビジネスや観光などで  
アジア各国を訪問する際に、  
搭乗機手荷物として  
運びます。

## いつでも、誰でも「はがき1枚」から参加できるボランティア活動。

### 参加要項

#### 対象

#### 「未使用、書き損じの官製はがき&未使用切手」

- 年賀状、暑中見舞いなどで宛名を間違えて  
投函しなかった「官製はがき」
- 転居通知などで余分に印刷して  
使用しなかった「官製はがき」
- 会議、会合の案内や出席通知などで  
投函しなかった「官製はがき」など
- 趣味で集めた記念切手や記念シートなど

#### 期間

はがき収集は年間を通じて随時実施。  
いつでも、何枚でも受け付けています。

#### 送付 方法

送料は「元払い」をお願いいたします。お送りい  
ただくはがきの枚数を数える必要はありません。  
●ご協力者の氏名、連絡先の明記をお願いいたします。

お問い合わせ・  
はがき送付先

公益財団法人  
**日本社会福祉弘済会**

〒130-0022 東京都墨田区江東橋4-24-3  
URL ▶ <http://www.nisshasai.jp/soratobu/index.html>  
TEL.03-3846-2172 FAX.03-3846-2185